

## 令和五年度秋田県小・中学校長研究大会 講演内容

(拍手) 成田です。初めまして。

秋田県の小・中学校の校長先生方を前にすると、ちょっと緊張します。僕が小学校、中学校の頃というのは、校長先生というのは雲の上の方だったので、こうやって高いところからお話しさせていただくのは、誠に恐縮であります。

映画の話もしたいし、いろいろお話しさせていただきたいんですが、僕がつくったコマーシャルなどの映像を時折ごらんいただきながら進めたいと思います。【映像視聴】

いかがだったでしょうか。秋田で流れていないものもありますので、見たことがないものもあったと思います。皆さんどうお感じになったかは分からないんですが、僕はきれいな映像がすごく好きなんです。あと、カッコいいものであるとか、ドラマです。ストーリー。人間の機微みたいなのを表現するのが好きでして、ずっとそれを描いていて、今に至るという感じです。

僕は、小学校の時は本当に人見知りか激しかったんです。例えば、お盆にいとこ達が集まって遊ぶ機会が毎年あったんですが、全然輪に入っていけなかった。一人で本や漫画を読んでいるという、そういう子供でした。引っ込み思案で、臆病で……。

それから、先生が本当に怖くてですね。別に怖い先生じゃなかったんですよ。でも、何というか、自分よりも立場が上の人というのがすごく怖くて、目も合わせることができない、先生の前に行くともっちゃうぐらいの子供だったんですね。それが今、こうやって皆さんの前で話しできていて、何か不思議な感じです。

高校生の頃、映画に魅せられまして、映画監督になれたらいいなと漠然と考えていたんですね。なぜそう思ったのかといいますと、小学校2年生の頃、いじめられて登校拒否になったりもしたんですが、

中学の時には少しまともになりました。ただ、何というか、高校の時も、友達とかはいましたが、ここにいるべきじゃないなという想いが何となくありましたね。世界に出ていかなきゃいけないんじゃないとか、せめて東京に行けば、自分に合う何かがあると、何となく肌で感じている部分があったんですね。やっぱりそういう小学生、中学生だったので、居場所みたいなものがあんまりなかったような気がしますね。

そういう子供というのは、自分を守らなきゃいけないし、生きていかなきゃいけないので、日常的に妄想の世界に入り込んでいく気がします。僕は、実際にはできないけれども、こうやったらいいなと頭の中で妄想して、ディテールまで映像化していたんです、今思えば。

臆病なくせに正義感が強いところもあって、例えばクラスにいじめられている子がいるじゃないですか。そういう子に対して何とかしてあげたい。でも、映画やドラマのように「やめろよ」とか言えないんですよ。それで、どうしていたか。頭の中で自分をヒーローに仕立てて、頭の中で彼を助ける、ということをやっていたんですよ。

実際はどんな行動をとっていたかということ、いじめられっ子の家に遊びに行くんですね。で、一緒に漫画を読んでいるだけなんです。それしかできない。声をかけてあげることもできず、ただ一緒に漫画を読んでいる。そういう子供でした。

今も、自分の中での正義みたいなのがありまして、それは守りたいというのは常にあるんですね。今は映像という武器を手に入れていますので、映像でそれを表現していきたい。まあ表現できている状態なわけですよ。

僕は、子供の頃から映画を観るのが大好きでした。特に海外の映画が好きでした。それは、映画を観ることで世界に一瞬にして跳べる、それが好きだったんだと思うんですよ。映画が逃げ場所というか、居場所だった。それに自分の妄想フェチみたいなの

ころも手伝って、回答を出した職業が映画監督だったような気がします。

あの当時、特に秋田だと、映画は映画館に行って観るか、テレビで「水曜ロードショー」とか「日曜洋画劇場」とかを観ていたと思いますが、当時、僕の家にはビデオがなくて録画できない。レンタル屋もないですから、リアルタイムで観ていました。

当時の映画は、例えば『アラビアのロレンス』なんかもワンカットが割と長いんですよ。ロレンスが砂漠でラクダや馬に乗ったりしているシーンがすごく長い。それで、描けるなと思って、このアングルちょっと面白いから描いておこうと、描きながら観たりしていたんです。

ある時、それを見た父親に「おまえ、何やってんだ」と言われて、「ちょっとこのアングルおもしろいなと思って」と言ったら、「それがどうした」と。それで、思わず、とても怖かった父親に「いや、映画監督になりたいんだよね」と言っちゃった。

僕は当時、映画監督かつアーコンダクターになりたかったんです、世界に出たいなと思って。でも、父親は「おまえには無理だ」と言うんですね。まあ、そう思われてもしようがない子供だったので、父親も心配していたと思うんですよ。だから、そういうのはやめて、もうちょっと安定した仕事をやったほうがいいと言われたんですよ。

だけど、僕は心の中で、多分できるんじゃないかなと思ったんですよ。「多分できるんじゃないか」という、ちょっと勘違いに近いようなことが、僕はすごく大事だなと思っています。

少し前、大分の耶馬溪校という高校の分校の生徒達とCMをつくったことがあるんですが、僕みたいな子、いっぱいいるなと思いました。逃げ場所がある人はいいんですが、ない人もいます。ない人達は、自分の個の世界に逃げるしかない。僕の場合、それが映像だったり、動画監督だったんです。

僕、才能があると言われてたりすることがまれにあるんですが、巷で言われる「才能」と僕が考える「才能」はちょっと違うと思っているんですよ。「人には言えないけど、これが大好き」というものとか、

「これだけは自信がある」というもの、僕はそれを才能と呼ぶと思うんですよ。自分が生きていくために必要なぐらい好きであるとか、必要なぐらいその場所に居たいんだというところがあれば、それを才能という言葉で表すことができるんじゃないかと思っているわけです。

耶馬溪校というのは、大分県立中津南高校の分校で、耶馬溪という山の中にある小さな学校です。中学の時、学校でうまくやっていけなかった子供達が多く入っています。不良に近い人もいますし、能力的に追いつかない人もいますし、性格的にも人と交わることができないような子供達が多い。

本体の中津南高校は進学校で、東大に行くぐらいの学校らしいんですが、本校の校長先生が分校の校長先生も兼ねていまして、来年度ある一定数の入学者がいないと廃校になってしまうと。だから、まずは何とか今の分校の生徒達に自信をつけさせたい。それで、「CMづくりをやってもらいたい」と、人伝に僕にお話が来ました。

すごく情熱がある女性の先生で、本当に想いが強くて、熱かったんですよ。僕も、彼女の心に打たれる形で、大分まで行って生徒さん達と会いました。

でも、やっぱり興味のない人には教えにくいので、挙手制にしてCMづくりに興味のある人達に集ってもらったんですが、3学年中20人という結構な人数が集まりました。ただ、皆さんを前に最初にお話した時は、やっぱり何か覇気がないというか、沈んでるといえるか、そんな印象でした。

それで、次に希望者を3つの班に分けて、役割を決めていきました。カメラマンやりたい人、スタイリスト・ヘアメイクやりたい人、技術やりたい人、というふうに挙手制にして。小さいテーブルで、本当にフェース・トゥー・フェースで、班ごとに自分達の役割は何をするのかをお話ししていったら、ちょっとみんな明るくなってきたんです。

CMにはテーマがあるので、耶馬溪のCMにしようということで、耶馬溪のいいところを挙げてくださいと言ったら、出てくるんです、結構。いいところに居ると、やっぱり精神衛生上もすごくよく

て、ポジティブになれるんですよね。

それで、実際に撮影になったら、みんな声が小さいんですよ。撮影というのは、大きな声で今何をやっているのかというのを伝えないと、事故につながる可能性がある。例えば、「本番です」という声が小さいと、本番中だと知らない人がカメラのフレームの中に入ってきたりする。すると、もう一回やらなきゃいけない。だんだんみんなイライラしてくる。

彼らはそんなに声を大きくしたことはなかったと思うんですよ。でも、とにかく声を大きくしましょうということ、僕もやたら大きい声を出しました。特に監督ですよ。監督が「ヨーイ、ハイッ！」とか「カット！」とか言うのが小さい声だと聞こえないでしょ。2日目ぐらいからはすごく大きい声が出るようになって、夏の真っ盛り、暑い中、みんな声を出してやりました。

ところが、驚いたことに、僕が「次、これして」と言わなくても、それぞれの役割をどんどんやっていくようになってきたんです。この役割はこういう役割だからというのを教えただけで、必要以上のことはあまり教えなかったんですがね。

そのかわり、すごく褒めましたね。「今、めっちゃ声が出てた」とか、「いや、それ、よく気づいた」とか、褒め続けていたら、最終的には本当にみんな笑いながら仕事をしていましたね。

先生がいろいろ飛び回ったんでしょうね、NHKで1週間、地元のニュース番組で取り上げられました。最終的には、中津にできた新しい映画館が、最初の上映として彼らがつくったコマーシャルを流してくれたんです。そんなに素敵なCMではないですよ。ですが、自分達が苦労して映像にして、それを映画館の中で観るとするのは彼らにはいい経験になったと思っています。

あの時は、人の成長を目の当たりにしました。「耶馬溪校に行かせるぞ」と言われていたくらいの学校の子供達が、見る見る成長していく姿というのはおもしろいな、やってよかったなと思いました。

皆さんは教育のプロ中のプロですから、全然かわないですが、僕は常に人の心に刺さるような、心

を打つような言葉遣いであるとか、気持ちであるとかは心がけようと思っているんですよ。

人の心に一瞬で伝わらないと、撮影もうまくいかないんですよ。CMって一瞬なんです。集まって、出来上がるまで、早ければ3週間で終わっちゃうんです。クライアントが代理店にCMを依頼する。そこで「監督は誰にする」と考える。「じゃ、成田洋一にしよう」と言ったら、僕に声がかかる。で、今度は僕がスタッフを集めるんです。その企画だったらあのカメラマンがいいなというようなことで、その作品ごとに違うんですよ、スタッフ。で、ワァッと集まって、ワァッと打ち合わせして、ワァッと撮影して3週間後にはできちゃうんですよ。

それぞれプロ中のプロで、本当に素晴らしい人達なんですが、そういう人達に一瞬にして僕のやりたいことを伝えなきゃいけない。時間がないんです、あんまり。最初に説明する時に、時間をかけずに要点をズバッと言う必要がある。

で、僕はコンテのほかに、前段として10枚ぐらいの説明みたいなのを書くんです。それはどういうことかということ、どんな場所で、何があって——そういうデザインも僕がするんですが、このフレームの中の、こことここに木があって、奥にも木があってほしいとか、レンズは何がいい、動きはこうだとか、着てる服は白で、すごく着心地のよさそうに見える物というふうに、めっちゃめっちゃ細かく決めるんです。その説明をコンテの前につける。で、それが契約書になる。クライアントの方にもそれを了承してもらって、みんなが同じ気持ちで撮影に臨むわけです。

そうするとトラブルないんですよ。だから、クライアントの方とか、代理店の方に説明する時も、いかに分かってもらうかということは、いかに心を打つかということだと思うんですよ。「あ、いいね、成田さんの演出、いいですね」と言わせなきゃいけない。それが一番大事だなと思っています。

僕のモットーは、誠実でありたいということです。とにかく誠実でありたい。他人に対して誠実は当たり前なんです。僕はそれより重視しているのが自分に対して誠実であるということ、絶対に自分には

嘘をつかないということです。

よく何かをやろうとか決めるじゃないですか。例えば、僕はフルマラソン、6～7回出たことあるんですが、4時間切りたいなと思ったんです。それで、金哲彦さんが「4時間を切るには100日前からこのメニューをやってください」というノウハウを書いた本を読んで、この日は何キロ走って、この日は何キロ、この日は坂道ダッシュ何本とか、書いてあるとおりにやり始めたんです。

めちゃめちゃ忙しかった時に始めたんですが、物理的にできなかった3日間を除いて、97日間は全部やったんですよ。撮影が終わって深夜の2時に帰ってきて、「エ～、これから15キロ走るのかよ」と思いながらも走る。

別にやらなくてもいいんですよ。誰も見てないし。やる必要はないんですよ。健康のためにはよくないかもしれないし。それでも、そこでやめたら自分に嘘をつくことになるじゃないですか。そして、それはクセになると思うんですよ。で、走るわけです、へろへろになりながら。でも、走った後、「やったァー！」と思うんですよ。俺は自分に嘘をつかなかった、自分に誠実でいられたとなるわけです。

そういうことをやっている、恐らくですが、僕が人に何か言うのと、同じ言葉を誰かが言うのとでは、受け取られ方がちょっと違うんじゃないかと思うんですよ。言霊とよく言われますが、本当にそう思うと思うんですよ。あまりごまかしの言葉は好きじゃないので、思ったことを言う。それが僕は大事だと思うんですよ。人の心を打つというのは、そういうことではないかと思っています。

映画『光を追いかけて』を撮ろうと思ったのは2016年だったと思います。CMの仕事が少し減ってきて、「あ、映画できるかも」と思ったんですが、なかなか機会がない。映画会社は見向きもしてくれないし、ネタもない。どうしようと思っていた頃、井川町の叔父が東京に遊びに来たんです。

叔父は、元消防署に勤めていて農家もやっているんですが、その叔父と一緒に飲んだ時に、「よっちゃん、俺、UFO見たことあるんだよ」と言うんで

すよ。消防署に勤めている時、119番を待っていた。井川町にスズキの工場があり、スズキの「S」という大きなサインボードがあるんですが、その上に緑の光が溢れたと言うんですよ。それがジグザグに動いて、消えた。でも、1人で119番待っていたから、騒いだら恥ずかしいなと思って誰にも言わないようにしようと思っていた。そうしたら、若い消防隊員達が来て、「今の見ましたか？」と言ったので、話してもいいかなと思ったらしいです。

叔父が、翌朝、収穫時期——9月10日だったので、田圃を見に行ったら、ミステリーサークルができていた。「何だ、これ？」ということで、あちこちで話していたら、『週間プレイボーイ』が取材に来て、写真付きで載った。後で送ってもらったんですが、これはもしかしたら映画のネタにしておもしろいかもと思って、それならやっぱり地元、秋田で撮ろうと思ったんですね。

最初はエンタメで、全然違う話だったんですが、それを友達の映画監督に見せたら、「成田さん、3億かかりますよ。これは無理です」と言われたので、じゃ自分の本来やりたかったこと、地元秋田の人が観て心を打たれるものにしたいと思ったんです。だったら、「中2病」と言われるぐらい、一番多感な世代の中学2年生を主人公にしたほうがいいなと。

映画のポスターに、「光を望むな。光となれ。」というコピーがあります。例えば、「何々になりたいな」だとか、「何々になれればいいな」「こうなればいいな」とか、皆さん光を望むじゃないですか。だけど、光を望んでいても光は訪れないんじゃないかと僕は思っていて、やっぱり自分が能動的に光をつかみに行くということが大事だなと思っているんです。だから、光を追いかけていくことになる。

で、結果として光をつかんだ時に、僕はその人自身が光になれると思うんですよ。光は周りを照らすことができる。周りにすごくいい影響を与えるんですよ。だから、頑張っって何かを勝ち取った人というのは、ほかの人達をも幸せにできると思うんです。そういう想いで映画を撮ろうと思ったんです。

うちの叔父役は柳葉さんにやっていただいて、ほぼ

同じ設定で、消防で119番待っている時に実際緑の光が現れるんですが、主人公の彰は、小学校の時の僕なんです。別に東京から転校したわけではないんですが、僕はあんな子でした。あまり周りと接触できなかった。

いじめられていた翔太ですが、やっぱりああいう子はいたんですよ。映画では翔太のほうから声をかけていっていますが、実際はそういうことはなかったんですが、僕は翔太の気持ちがすごく分かるんですよ。

いじめのシーンも、映画でよくあるような悲惨ないじめは描きたくなくて、それよりも日常的な、いじめなのかいじめでないのか分からないことが多いのではないかと思って、そういう形にしたんです。ですから、すごくリアルじゃないかなと僕は思っています。

真希という登校拒否の女の子や学級委員、いじめっ子とか、登場人物はいろいろいますが、いじめっ子を除いて、ほぼ僕のどこかの部分をキャラクター化しているんです。全員が僕。それをストーリーの中に入れているので、全部僕の話という形になりましたね。

そして、悪い人は一人も出てこない。いわゆる勧善懲悪——悪い人がいて、そいつを憎むことで主人公に感情移入していくというストーリーづくりはあまりやりたくない。なぜかというと、みんな理由があると思うからです。一見やんちゃな子供達、大人もそうですが、必ず理由があると僕は思っています。人間は環境さえよければみんないい人なんだろうなと思っているんです。

だから、三浦といういじめっ子を登場させたかったのもそういう理由で、彼は過疎で家族が引越をしてしまい、友達と離れ離れになっていくのをずっと悩んでいて、それがああいう行動になってしまう。まあストレスのはけ口だったりするんですよ。それを描くことが大事だなと思って。

だから、映画を観ていただいた方に言われるのは、「すごくリアルだった」というのと、あと「何だか分からないけどよかった」。実は、「何だか分からないけどよかった」というのが一番嬉しいんですよ。ハリウッド映画みたいに、「終わりました。全部解決しました」というのが嫌で。

それはそれで全然いいんですよ。ただ、僕はそれ

をやりたくない。僕がやりたいのは、見終わった後に自分の心の中に残してずっと考えてしまうということをやってもらいたいんです。だから、解決してない。解決の糸口が見つかったぐらいかなで終わらせているんですね。それがやりたかったんですよ。

で、まず秋田に住んでいる方々を3つに分けたんです。そして、それぞれの役割を背負わせたんですが、奈良美晴役の生駒ちゃんは、秋田から東京の大学に行って、本当はグーグルとかに就職が決まりそうになっていた時に、お父さんから呼び出され、「秋田のために先生をやれ」と言われて、嫌々戻ってきた。だから、ずっと秋田から出るチャンスを窺っているという、そういう設定にしました。

駿河太郎さんが演じる良太は、ミュージシャンになろうと思って東京に出て行って、夢破れて帰ってきた。それで、彼は地元のために頑張ろうと思ったんでしょね。だから、町役場に勤めている。でも、奥さんに逃げられて離婚している。ひどいことをしてたんじゃないですか、多分、あの様子からすると。

彰はもう嫌々来ているわけですよ、秋田に。

柳葉さんは、秋田を信じてるというか、自分はここで生まれたからここで死ぬんだという、シンプルな考えの人なんです、恐らく。だから、伝統的なこと、いわゆる自分の生活スタイルみたいなものは、守るというより「いや、これ普通だから、俺にとって」という考え方なんです。柳葉さん、「変わらなくてもいいごどもあるんでねが」と言いながら、照れくさそうに笑うんですよ。

でも、それぞれがやっぱり心が変化していくわけです。僕は、実は秋田に来て同級生たちと飲んだりしている時に、心の中で密かに思っていることがありました。それを彼らに言うと、雰囲気が悪くなるだけだなと思って言わないんですが、映画の中でそれを絶対言おうと思ったんですよ。

それは居酒屋のシーンです。結構緊張感がある。あそこで良太が歌を歌う。すると「そんな能天気な歌、やめてけねが」と言われる。彼は町役場に勤めているので、「農業がだめになったのは、町とか県のせいなのに、おまえ、何、歌ってんだよ」みたい

なことを言われるわけです。

でも、僕はそうかなのかなと思っていて、一人一人がやれることをやれば、よくなるんじゃないかなって思っていたんです、ずっと。特に秋田は、本当に過疎が進んでいて、人口減少率や自殺率が1位とかとニュースで聞くと心が痛むんです。でも、その話をしても、みんな「自分達は大丈夫だから、まあ大丈夫じゃないかな」と言う。それはそれでいいんですが、「いや、もっと動いたほうがいいんじゃないかな」と思っていて、それを言いたくて、あの先輩の女の先生に思い切り言わせたんですよ。

彼女はああいうキャラクターなんです、すごく正義というか、思ったことを全部言うみたいな。だから、後輩には厳しくなるし、生駒ちゃんがちょこちょこ就職のサイトを見ていたり、真希を放っておいたりすると許せない。

居酒屋で彼女が言った台詞というのが一番僕が言いたかったことで、「県とか町の人に言っているけど、じゃ、おまえは何やってんの？」と。ちょっと映画では乱暴な言い方でしたが、みんながやればいいのにと思っていて……。

それで、ラスト近く、米づくりのほかに町が助成金を出すから花卉栽培をやらないかと駿河太郎さんが柳葉さんに言うんですが、「誰かが動かねばよ」と。僕はそれを言わせたかったんですね。

僕は東京に行って秋田を客観的に見ていたので、すごく良太に近いんですね。本当は大変だろうと思うんですよ、一人一人が動けと言ったって、なかなかできないですよ。それも分かった上で、だったら言った本人がまず動けばいいんじゃないかなと思って、それで良太が動いたということにしたんですよ。

「動けよ」と、東京に住んでるやつが言っても説得力がないんですよ。それよりも戻ってきて役場に勤めていたやつが言えば、説得力がある。

『光を追いかけて』は四つの映画祭に招待されたんですが、コロナ禍だったので全部には行けなくて、ドイツにだけ行ってきたんです。その時、試写が終わって観客の方とお話しする機会があったんですが、一人の方が「この映画の中で『あんたは、何、

やってんの』って言った、あそこはすごくよかった。でも、監督、あなたは実際に今何かやってんの？ こういう映画つくって終わりなの？」みたいなことを言われて、ああ鋭いなと思いましたね。

僕自身はどうかというと、今回の映画は井川町を舞台にしてつくったんですが、まだ若い町長がすごく映画に協力してくれたんですよ。役場の方々も総出で手伝ってくれた。だから、このまま映画つくって終わりじゃないなと思ったので、井川町のために何かやろうと思って、2019年ぐらいからだから、もう5年目かな、毎年いろんなことをやっています。

決して派手なことじゃないんですが、例えば「いかわさんといっしょ」というプロジェクトを始めたんですよ。それは井川町を売るのに、人と同じことをやるのはどうかなと思って、あそこは国花苑の桜で有名ですから、「いかわさくらさん」というふうに、町を擬人化したんですね。僕、女優の井川遥さんとCMを通じて少し仲良くしてもらった時期があったんですが、本当にいい方なんです。あの方を思い浮かべてキャラクター設定をして、本当に優しくて、菩薩のような「いかわさくらさん」というキャラクターに町を擬人化して、「いかわさんといっしょ」というコピーをつけて、今展開しています。

その一環で、井川町に義務教育学校があるんですが、素晴らしい学校で、これを映像化したいなと思って、先日、先生や子供達にインタビューをさせていただきました。インタビューをしていて感動したんです。こんな学校あるんだと思って。自分もここに入ればよかったと思うぐらい感動しました。その映像もホームページの中にありますので、皆様よろしかったらぜひごらんになってください。

ほかにも秋田を映像県にしたいという企みもあるんです。秋田にアウトクroppという国際教養大学出身の25と26の若者二人でつくった映像プロダクションがあるんですが、彼らはすごく優秀で、すごく素直です。彼らがつくった企業さんのCMを僕が全体を見たりとか、今は手取り足取り教えている状況ではありますが、すごい勢いで成長しているので、恐らく近い将来、東京のクライアントが秋田に発注す

るようになるのではないかと考えています。

映像県になったら、映像やるのに東京に出ていなくていいでしょ。そうしたら若者達が秋田に残る。何か一つやったら、芋づる式にいろんな人がかかわってきますから。

今回、このお話をいただいた時も、僕はすごく嬉しかったですね。校長先生といたら、教育界のトップですからね。だから、皆さんの前で僕の想いをお話して、何かあればぜひ協力したいという気持ちもあります。

ここでまた映像を観ていただきたいと思います。

### 【映像視聴】

今、3本見ていただきましたが、1本目は由利本荘市にあるリバーロードというカフェのCMです。32～3歳の社長ですが、由利本荘を何とかしたいからカフェから始めているという方です。だから、僕はリバーロードを売るというよりは、リバーロードの社長の想いを売る、そういう作品にしたかったんですね。それを心掛けるようにしました。

2本目は、井川町のPVで、春夏秋冬の4編を制作しているうちの春編です。ここもアウトクroppと一緒にやっているんですが、歌もオリジナルでつくっています。黒崎平君という、まだ25歳くらいの若者ですが、彼は「映像を観るだけではつukれない。生で被写体である家族の姿だったり空気だったりと一緒に感じることでつukりたいんだ」ということで、撮影に同行しているんです。だから、すごくいい歌ができましたね。

町をどう売るかを考えた時、僕はそのままを売りたいなと思ったんですね。本当にいい町だなと思うので。だから、町の春夏秋冬を撮りたいと。春と冬をつukって、今、夏を撮影しています。この春編には二家族出ているんですが、一家族は三世代でした。山菜などを採りに行って、それをみんなで食べる。見ていると、何かジーンと来る。出来上がったものを町に持って行って、町長並びに役場の方に見ていただいたんですが、皆さん涙したんです。何か自分たちの誇りというか、プライドのようなものを思い出してもらった、自分達の町ってこんなに素敵だっ

たのかということに気づいていただけたんじゃないかなと思いました。

だから、そのままをなるべくフィルターをかけずに、逆にいかにコアな部分を導入していくかというところでやれればと考えています。

実は、アウトクroppと先週も別のCMを撮ったんですが、スタッフが15人ぐらいかな。その中で秋田出身が3人くらいで、あと全部県外なんですよ。県外の若者達が映像をつukりたい、秋田が好きだと言って来ているんですよ。春編の歌をつukってくれた黒崎平君も長野出身です。アウトクroppの二人は、ドイツ人のハーフとオーストラリア人のハーフです。彼らはもちろん英語も堪能ですし、海外を知っているんですが、秋田がいいと言って、秋田で活動しています。

だから、客観的に外から見たほうが、秋田がちゃんと見えるんだなと思いました。そういう秋田が好きという若者達に協力して、一緒に僕も成長していきたい。そういうことができたらいいなと思っているということを、ドイツの映画祭で僕に質問してくれたドイツ人の方には答えました。

3本目は、一昨年つukったサンスターの「GUM」、お口や喉の殺菌スプレーですが、ちょうどコロナの時期で、それをCMではなくてWebで流したいという依頼があったんですね。それは受験生をテーマにしているんですよ。コロナにかからないように殺菌スプレーをしてから受験に臨む、そんなような映像をつukってくださいと言われてましてね。

ターゲットが高校生や中学3年生なので、音楽をラップでやりたいなと思ったんです。ラップは言葉をいっぱい詰め込めるし、しゃべっているのに近いので、伝わりやすいんじゃないかなということ。

だったら、ちょっと秋田を絡めたいなと思って、五城目町に羅漢という友達がいて、彼にやってもらった。そうしたら、1週間で100万再生、2週間で200万再生というすごいことになった。映像が認められたのも嬉しいんですが、羅漢の想いも伝わったとか思って、すごく嬉しかったですね。

やっぱり彼らが僕を信じてくれるのも、先ほど言

った自分に誠実であるということが生きていような気がしているんです。

実は、『光を追いかけて』は、町長に相談に行ってから2年間、全く動きがなかったんですよ。お金がないとつukれないので、県庁にも二、三回お願いしに行ったんですが、県は前に何度か失敗しているんで、「成田さんの気持ちはわかるし、企画もいいけどちょっと出せない」と。で、時間ばかりたっていったんですが、僕の心の中には絶対できるという気持ちがずっとあったんです。

そうすると、協力してくれる人が出てくるんですよ。誰かいないか、成田さんに手を貸せないかと呼びかけてくれた。

2018年の冬、友達が「ある企業の社長が、映画に興味があって、成田さんに会いたがっている」と言ってきて、池袋のホテルでお会いしたんです。その方が、2時間ぐらししゃべった後に、「お金出します」と言ってくださったんですよ。考えている制作費の7割超えを出してくださった。そんな人いるのかなと、びっくりですよ。

そしたら、その2か月後くらいに、京都のある旅館のショートムービーをつくってくれと言われて行ったんですが、その社長さん、実は本業は老舗の繊維問屋の社長で、旅館は奥さんの御実家の手助けをしているということでしたが、僕を気に入ってくださって、映画制作に資金を出してくださいました。その方、今でも応援してくれていて、京都に行くたびに会いしています。

その二人や、秋田の経営者の方々、町が資金を出してくれましたので出来上がったんです。そういういろんな人の想いが入っている映画なんですよ。

だから、何というんですか、映画監督になりたいという高校時代の自分の夢のかない方がすごく好きなんです。あれだけ人見知りで臆病だった自分が、親父にもおまえには無理だと言われていた映画監督に、自分の人生の中で自分を修正して、成長させていったことでかなえられたというのが、本当に嬉しいなと思っています。だから、映画もそういう映画にしたかったし、そういうことが伝わるような

映画にしたいなとは思いましたね。

次の映画が12月8日に公開されます。この映画は、『光を追いかけて』を観た松竹のプロデューサーが、「ぜひ成田さんに」ということで決まったらしいんですが、去年の10月にいきなり電話があって、行ったら1冊の小説を渡された。原作は30代の女性の国語の先生でしたが、60万部を超えたらしいんですよ。読者のほとんどが10代、20代の若者達で、TikTokで本を紹介する人がいて広がったらしいんです。恋愛小説なんですよ。それを渡されて、「恋愛映画をつくりたい」と言われた。正直、恋愛映画には全然興味がなくて撮りたいとも思っていないので、「恋愛映画は無理です」と言ったら、「いや、恋愛物なんですけど、戦争を題材にしてるんです。とにかく一度読んでみてください」と言われたんですよ。

家に帰って小説を読んだら、汐見さんという女性の方が、小学生の頃、特攻記念館かなんかに行った時の衝撃が忘れられなくて、それを小説にしたと。原作では現代の女子中学生がタイムスリップして、1945年、昭和20年の終戦間近の世界に行き、そこで特攻隊員と、という恋愛物なんですけど、原作者の「戦争ふざけんな」という想いがすごいんですよ。

僕はウクライナとロシアのことで、何でこんなことをするんだろうと相当怒っているんです。で、それを描こう、「戦争ふざけんなよ」というのを描こうと思ったんです。松竹もそれでオーケーと言ってくれたので、「じゃやみましょう」となったんです。

僕は『光…』の時は秋田のためにやったんですが、今回は、大げさに言うと、世の中のためというか、戦争を絶対やっちゃいけないという、そういうメッセージを込めたんです。『光…』もそうですが、今回の映画もぜひ小学生の方にも見てもらいたい。ひどいシーンはほぼないんで大丈夫です。

ちょっと時間オーバーしましたが、長時間、御清聴いただきありがとうございます。これで終わらせていただきたいと思います。（拍手）